

## 井樋政之允の最期

緒川小学校の南にある井樋家墓所(上小瀬字吹上)には、幕末の上小瀬地域で尊攘派リーダーとして活躍した井樋政之允いとうまさのじょうが眠る墓域があります。天狗諸生の内乱の中で壮絶な最期を遂げた政之允の生涯をたどります。

## ◇井樋政之允の活躍

那珂川の支流緒川が流れ、水戸と武茂領(那珂川町)や野州烏山(那須烏山市)を結ぶ街道沿いに位置していた上小瀬村(緒川地域)は、江戸時代初期の寛永18年(1641)の家数が282戸、後半の天保14年(1843)の家数180、人口が978人という大きな村でした(大町家文書「上小瀬村田畑持高名寄帳」)。

江戸時代前半の井樋氏についてははっきりしたことはわかりませんが、政之允は死亡時の年齢から、享和3年(1803)頃の生まれと考えられ、40歳を迎えた天保14年には上小瀬村の庄屋を務めていることがわかります。

ちょうどこの頃、水戸藩9代藩主徳川斉昭が進めた天保改革の一環として、寛永検地以来200年ぶりに領内総検地が実施されることになり、政之允らのような斉昭の改革政治を支持する上層農民が検地の指導役として任命されました。政之允をはじめ、小場村の安藤幾平、大岩村の竹内次左衛門(源介)、馬頭村の星惣兵衛など、斉昭の政治改革を農村で支えた人物たちです。彼らは、ペリー来航後の幕府による無勅許調印に抗議した斉昭が謹慎処分を受けたことに対し、それに抗議する運動を中心として展開し、安政2年(1855)には士分に準ずる郷土身分となっています(ほかに西塩子村の大貫慎介、野口村の大沢次左衛門など)。

井樋政之允もこのとき郷土となり、その後、万延元年(1860)から文久3年(1863)の史料では隣村の小舟村の庄屋を兼務していたことがわかります。また、山横目として周辺の数十か村を指導する立場にありました。



▲井樋政之允の記名のある古文書(小舟区有文書)

## ◇井樋家の苦難

やがて幕府と結んだ保守派が藩の政権を握ると、農民層の間にも対立が起こり、井樋ら改革派農民やそれを支援した人々が諸生派農民(民兵隊)から打ちこわしなどの迫害を受けるようになります。領内北西部を中心とする打ちこわしを主導したのは鷺子村の薄井友衛門や額田村の寺門登一郎で、元治元年(1864)8月1日から8日にかけての打ちこわしは常陸大宮市の全市域に及びました。水戸上市の商人大高織衛門の日記にはこのときの様子が生々しく記されています(「大高氏記録」茨城大学図書館蔵)。それによれば村々から数千人の集団が襲来し、東野村庄屋綿引勘兵衛や西塩子の大貫慎介らの家を打ちこわし、井樋政之允は槍で突き殺されたと書かれています。このことは明治44年に建てられた政之允の墓碑にも刻まれています。



◀井樋政之允の墓(上小瀬)

「井樋政之允君は清和源氏より出て22代を継ぐ、性格は温厚篤実で、代々郷土として山横目を兼ね、居村ほか15か村の取締りをなす、栃木県芳賀郡河井村服部伊左工門の伯母紺子を娶る、かつて水戸藩が正姦二党に分かれた際は正党(天狗派)に属し、3年間投獄された。その間妻は家政を掌り貞女として烈公から褒美を与えられた。政之允は牢で目を病み失明した。元治元年八月一日姦党(諸生派)の刺客に襲われ殺された、痛ましいことである」(大意)。

村の指導者として村政にあたり、また積極的に政治活動を行なった生涯は、最期まで波乱に満ちたものでした。傍らには政之允死去の3か月前に没した子の五郎兵衛の墓があります。五郎兵衛は同じく改革派農民として有名な安藤幾平の長女を娶り、同志との強固な結びつきの中で、父と共に活動しました。

【参考文献】高井良水「天狗諸生と井樋政之允」『おがわの文化』6号 昭和54年、『水戸市史』中巻(三)~(五)